

「日中植林・植樹国際連帯事業」2019年度中国大学生友好交流訪日団
(安徽省分団・江蘇省分団)
参加者の感想(抜粋)

安徽省分団(高知県)

○高知大学には障がい者、耳や言葉の不自由な学生のための特別修学支援があった。皆はこうした学生たちと頻りに交流をしているとのことだった。しかし中国では、こうした学生たちは往々にして閉鎖的な環境で管理されることが多く、彼らを保護し、守り、自分たちが健常者とは異なることを理解させようと指導している。けれども高知大学のように両者が交流することで、学生たちは内に秘めた可能性やポテンシャルの気付きにつながる可能性もあり、また通常クラスの学生との間に相互交流も促進される。通常クラスの学生たちにとっても、何気なく送っている学生生活を、より大切にするきっかけとなる。こうした交流はお互いが助け合い、学び合う大きなメリットをもたらす。現在の中国では、短期間に両者を融合させる教育環境を整備するのは難しいかもしれないが、私は高知大学の訪問を通して、大いに啓発された。今後は障がい者との交流活動にもっと積極的に関わって行きたい。学生会の幹部として特別支援学校の参観、サポートなどのボランティア活動も展開していきたいと思うし、自分の周りの友人たちも巻き込み、同年齢の障がい者の人たちのことを思いやり、また彼らからもくじけない精神を学びたい。

日本人の防災意識の高さ、防災準備の周到さが印象深い。中国はそれほど天災が多い国ではないが、日本の転ばぬ先の杖の精神は学ぶに値する。必ず必要か分からない避難所であっても、さまざまな災害が発生する前に、対策や自助の備えをすることは重要である。今回、私たちも多くの防災教育に参加した。中には単一的な内容だと思えるものもあったので、今後は自分たちのアイデアを盛り込んだ防災教育も考えて行きたい。

○学ぶべき点：①知識を教えるだけでなく、自然に対する意識や人間性を育む教育システムが築かれていた。中国ではゴミの分類がスタートしたところだ。小学生にその重要性を理解させ、参加させるには、日本の方法が参考になる。②管理システムが進んでいる。上海浦東空港で荷物を託送する際、エアクッションなどの用意が無かったが、日本ではしっかり梱包してくれた。高知県立牧野植物園では高齢者や障がい者のための設計が施されていた。③生涯学習。労働力不足を補うため、更には自己追求のために、日本では多くの高齢者が働いていた。

異なる点：①日本人のもてなしには長所と短所がある。外国人は大事にされとても心地よいが、それを提供する日本人は枠の中に縛り付けられ、個性を抑え、ストレスがたまると思う。是非、日本人に中国へ来てもらい、自分の個性を出し、リラックスして、豊かでくつろいだ生活を味わって欲しい。

伝えたい情報：①中国と日本の差異は科学技術、経済、政治においては見当たらないが、教育においては日本が中国より進んでいる。②両国関係は紆余曲折がある。戦時中でさえ多くの中国人が日本に留学していたし、今もしかりである。両国の国民は更に交流を深め、胸襟を開き、虚像を打ち壊すべきである。③中国人は自身をむやみに卑下す

る必要もないし、逆におごり高ぶる必要もない。両国民はともに優れたところ、秀でた点がある。共に手を携えて進むべきだ。

○日本は環境保護を大変重視しており、多数の規制・制度は合理的で意義がある。中国は参考とすべきだ。また、地理的要因により、日本の一部地域は天災が多発しているが、そうした地域では合理的で整備された防災手段が講じられ、市民も支持しており、素晴らしいと思った。

日本人は冷静で自己を律し、礼儀正しく、素養が高いと思った。失礼に当たることは慎み、自分の感情を抑えている。公共の場はとても静かで、こうした礼儀は学び、実践していくべきである。帰国後は周りの人に伝え、自分から行動を起こしていきたい。防災に関して、日本は非常に進んでおり、災害を未然に防ぐ努力、万が一の措置が取られていた。私の住む場所は天災が少ないため、こうした防災意識は比較的低い。もし天災に襲われたら、相応の措置も無く、自助の意識も持たないため、誰かの助けを待つのみだろう。帰国後は、周囲の人たちと防災に関する予備知識を共有し、自分の命は自分で守るという考え方を強化していきたい。

中日大学生 500 人交流では著名な声優の劉セイラさん、カッコいい橘ケンチさんにも会えたのが非常に嬉しかった。そして日本の大学生との交流も楽しく、異なる国の大学生同士だが興味の的も似ていることも分かった。お喋りや写真を撮り合い、素敵な時間を分かち合い、最後には SNS の連絡先も交換したので、これからも連絡を取り合っていきたい。

○防災学習の中で印象深いのは、「人は自然と共存するべきだ」という NPO 法人砂浜美術館の先生の言葉だった。災害に対して、我々は恐れたり、逃げたりしてはならない。それを受け入れ、寄り添い、どうやって共生するかを学ぶべきだ。地震、津波、土石流、洪水、干ばつなどの自然災害は甚大な損害をもたらし、人々を震え上がらせる。まるで巨大な怪獣に対するように、我々は恐怖の念を持っている。しかしよく考えれば、人類の営みが環境に及ぼす影響は小さくなく、人と自然は一体だとさえ言える。我々は互いを認め合い、融合し合い、自然界と人類が共にあることを再認識すべきだ。人と自然が別物であるとの考え方を一掃すれば、環境も人類に優しくなり、逆に災難に襲われた時にも人類はそれを受け入れることができるだろう。

中国では、多くの中高年層の人々は環境を他人事と見ているが、若者は環境保護、SDGs に関する理念を深く心に根付かせている。中国で地震はそれほど多くはないので、防災施設、防災教育、備蓄などは政府に頼るところが大きい。しかし環境保護は、人々の心に訴えやすい。帰国後は「自然と共存するべきだ」という概念を多くの人と共有し、自然との共存や共感の心を広めていきたい。

最後に、日本側の心のこもった手配のおかげで、多くを学ぶことができ感謝する。また機会があれば、更に深い交流を希望する。有難う！

江蘇省分団（福岡県）

○北九州エコタウンで、古い家電製品やプラスチックゴミの回収リサイクルセンターを

見学した。日本では政府から企業、個人に至るまで、環境保護を非常に重視している。個人の環境理念プラス先進的な技術が、環境をしっかり守っていく上で欠かせないことを知った。

植樹活動、環境保護、防災分野の視察を通して、自分が専攻している環境科学や専門プロジェクトの任務は重く、道はまだまだ険しいと感じた。日本では防災、環境保護分野では成熟した技術、整備された制度、そして国民の高い意識がある。幼少時代から環境教育を徹底し、次世代の子供たちに環境保護の意識を植え付けている。この点は我々に欠けている点だと感じた。

九州産業大学や中日大学生 500 人交流に参加して、人は未知の物事に大きな期待や好奇心を持つことを知った。未体験の経験を積み続けることが、人生の本質であり、異なる文化のもたらすさまざまなぶつかり合いも、最期には思いがけぬ良い結果をもたらすことが多いものだ。

いかなる業界においても、日本の人々は仕事に熱心で、細やかに取り組む姿が印象深い。これからの自分の学習活動、特に科学研究においては、こうした精神に学び、熱心に研究活動に打ち込み、自己の専門分野に成果が残せるよう精一杯努力したい。ホームステイ先の S さんに、私は将来大学で教えたいと話した。別れ際に、「教授になったら絶対に知らせてね！」と激励してくれた。私はとても感動し、これからも希望を胸に、奮闘を続け、更に努力しようと思う。

○一週間の訪問を通して、日本社会の秩序と文明の高さが印象深い。高速道路でのむやみな追い越しや車線変更は無く、エスカレーターでも左側にきちんと並んで乗っている。こうした秩序の正しさは日本文化の中にしっかりと根付いている。相反して、中国人は焦りやはやる気持ちから、混乱や苛立ちの状況に陥りやすい。この点は中国人として日本から学ぶべきだと思う。中日両国間は、もっとお互いを広く認め合い、異なる文化を尊重し合い、違いを受け入れ、理解を深めることが必要だと思う。

ホームステイでは Y さんのお宅にお世話になった。日本の方はとても温かくもてなしてくれた。伝統と近代的な融合が生活の中にも見られ、独特だと思った。こうした細かい観察が日本を理解する良いきっかけとなり、日本文化の基礎をより良く理解する助けとなる。また日本では高齢者を敬い、幼い子供たちを守る習慣は、中国の家庭観念にも相通ずるものだった。

古代から現代、工業から商業のさまざまな面で、日本人の細やかさ、厳しさを見ることができた。今回の訪問では、両国間の絆が深まり、言葉の壁を越えた友情、民族や文化の壁を越えた友好協力が成し得ることが分かった。こうした協力関係が両国のさまざまな分野での発展を促し、アジア、そして世界の発展にしかるべき貢献を果たすものと信じている。

○中国ではゴミ分類はまだ全国に普及していない。しかし日本ではかなり整備されたシステムと制度が確立されていた。ペットボトルは捨てる前に包装ラベルとキャップを外し、中を洗って捨てる。工場ではそれを圧縮して、再利用している。日本国民は環境保護に関する決まりをしっかり順守している。ゴミの分類も、公共の場での禁煙も、政策

が順調に進むか否かは、市民の協力と密接な関係がある。こうした点で、両国には差がある。

九州産業大学を訪問した際、日本の学生が中国での学校訪問の体験談を楽しく語ってくれた。興味深く、とても魅力的だった。中国の授業では、こうした双方向の授業内容は少なく、お決まりの授業スタイルで、学生の注意を惹きつけるのが難しい。これは中国教育に長く存在する課題である。日本人はおとなしい、真面目、一本調子と言った印象があるが、こんなに楽しく生き生きとした大学の授業が受けられるなんて、考えさせられる点が多かった。中国社会はこんなに活気があるのに、授業になると一気に単調でつまらなくなり、学生と先生の交流も少ない。そのために学生も活発な性格を出し切れないと思う。

○植樹活動を通して、江蘇省と福岡県の友好関係をこの目で見ることができ、中日友好を深く心に刻むことができた。日本の環境や防災技術は世界でもトップレベルにあり、政府、民間企業、市民の三者協力により、都市の関連機能は更に発展している。三者の相互理解や協力の在り方は学ぶべき点だと思う。

植樹活動、環境防災施設の視察、交流活動のいずれも印象深い。日本科学未来館、王禅寺エコ暮らし環境館など、館内の設計は青少年に最適だった。青少年時代は物事の考え方、意識を形成する上で重要な時期であり、日本はこの時期における環境保護の意識向上を重視している。こうした点は我々が学ぶべきである。日本のゴミ分類システムは非常に厳格で整備されている。中国でも 2019 年からゴミ分類政策が実施されたが、実施過程では困難にも直面しており、日本の経験を参考にしたい。一定の足並みで推進し、ゴミ分類が国民の共通認識になった後、更に細分化を進めていくと良いだろう。幾つかの環境保護学習に参加したが、北九州エコタウンが一番印象に残っている。北九州市は 1960 年代、環境に悪影響を及ぼす産業の集積地であったが、現在では環境と見事にハーモニーを取っている。ここまでの道のりは決して平坦ではなかっただろう。こうした大きな転換は政府、民間企業、そして市民の三者における理解と協力が無ければ成し得ない。北九州市は「煙突から排出される七色の煙の町」から、「星空の都市」に変化を遂げた。そして高度に自動化、整備されたゴミ分類、再循環利用のシステムを構築した。廃棄物を価値あるものに変える、ゴミを有効な資源に転換して再利用する、この考え方を学ぶべきだ。中国ではシステムはまだ整備されていないが、身の回りの小さなことからやってみよう。例えば、ペットボトルの蓋を外す、捨てる前につぶすなどのことでも良い。小さい活動であるが、美しい環境を実現するための何らかの一助になると信じている。